

# 難民 REFUGEES

1998年第5号(通巻112号)

## 故郷への帰還 モザンビーク再訪



UNHCR

国際連合  
難民高等弁務官  
事務所

## 戦争は終わっても

この10年間、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) は、大規模化し複雑化する緊急事態への即応能力をみがき、強化してきた。いまでは世界中のどこへでも、72時間以内に専門家のスタン・バイ(待機)チームを派遣できるし、アフリカ中部や中央アジアへも、食糧やテント、医薬品を必要最小限の時間で送れる。また、支援要請があればいつでも対応できるよう、従来からのNGO(民間援助団体)パートナーや政府との合意体制もとのえた。

しかし戦闘が終わったとき、キャンプでの厳しい生活を乗り越え、さあ生活を立て直そうという人々には、何が待ち受けているだろう。それまで私たちが援助してきた難民や避難民が帰ってくる場所には、家も学校も診療所も仕事もない場合が少なくない。だが、戦後の復興と和解には、帰還民がうまく社会に溶け込んでいけるかどうか

たどり着いたときから、自給自足を支援する開発機関がやってくるまでという、帰還民の一連の流れのなかでもっとも微妙な時期に、UNHCRは重要な「橋わたし」の役割を果たしている。

そのために考えられた非常に野心的な計画が、「即効プロジェクト」(QIPs)である。1990年代前半、UNHCRはモザンビーク難民の再定着を支援するため、QIPsに1億ドルを投じた。これにより当初の目標が達成されたことから、今後はQIPsの長期的な継続可能性を検討していく考えだ(特集記事を参照)。

しかし再定着の方法については、たしかに強化と調整が必要だ。モザンビークでの教訓と、早期計画と機関間の密接な協力が必要との認識から、UNHCRは最近、世界銀行と「協力の枠組み」を作った。その根底には、経験と資源を共有すれば戦争で荒廃した社会をうまく助けられる、との考えがある。

人権の尊重と法による統治を強化するため、UNHCRは国連人権高等弁務官 (UNHCHR) や欧州安全保障協力機構 (OSCE)、草の根の人権団体などとの協力関係も深めている。

戦争で破壊された社会を再建するのは、長く、不安定なプロセスである。確実なやり方というものはない。ただ、人道活動や開発援助活動において緊急事態への対応方法を改善するなかでこの数年間ではっきりしたことは、戦闘が終わった後、おびたしい数の避難民(現在ギニアビサウで起きているような事態)が生活を再建できるような環境を整えることにも、もっと注意を払っていかねばならないということである。



© AP/D. GUTTENFELDER/KEYSTONE

アフリカの新たな  
難民危機：  
最近ギニアビサウを逃れて  
きた人々。

が大きなカギとなる。UNHCRは、帰還民全員ができるだけ早く再定着することを強く願っているが、そのプロセスのなかでUNHCR自身がどんな役割を果たすべきかについては、組織内部でも人道活動の世界全体でも大きな議論がある。

UNHCRにとって一番の目標ははっきりしている。それは、あらゆる帰還が自発的に、安全に、そして持続可能なかたちでなされることである。わずかな緊急物資しかもたない帰還民が故郷に

ある。確実なやり方というものはない。ただ、人道活動や開発援助活動において緊急事態への対応方法を改善するなかでこの数年間ではっきりしたことは、戦闘が終わった後、おびたしい数の避難民(現在ギニアビサウで起きているような事態)が生活を再建できるような環境を整えることにも、もっと注意を払っていかねばならないということである。



編集者 : Ray Wilkinson  
 寄稿者 : Corinne Perthuis, Carol Bachelor,  
 Judith Kumin, Bernard Kerblat,  
 Lyndall Sachs, Mehary Maasho  
 編集アシスタント : Virginia Zekrya  
 写真部 : Anneliese Hollmann,  
 Anne Kellner  
 デザイン : WB Associés - Paris  
 制作 : Françoise Peyroux  
 総務 : Anne-Marie Le Galliard  
 配本・発送 : John O'Connor  
 Frédéric Tissot  
 地図・衛星画像 : UNHCR Environmental Data Base  
 地図原典 : © ADC WORLDMAP, NCGIA  
 作図 : © Walter H. Smith  
 and David T. Sandwell - CHALKBUTTE INC.

日本版  
 翻訳協力 : 藤原 朝子、佐藤 綾子  
 編集・総務 : 日本・韓国地域事務所 広報室

『難民Refugees』誌は、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）ジュネーブ本部・広報部と東京にある地域事務所が発行する季刊誌です。寄稿記事に表わされた意見は、かならずしもUNHCRの見解を示すものではありません。また図示された国境の表示は、各領土およびその政府当局の法的立場に対するUNHCRの見解を表明してはおりません。

掲載記事の編集権はUNHCRにあります。掲載記事・写真のうち、著作権©表示のないものの転載・複製には許可が要りません。また©表示のない写真は、事前に承諾を求めた出版の目的に限り使用を認めます。

本誌の日本語版制作協力：(株)イソラコミュニケーションズ(東京)、英語版および仏語版制作協力：ATAR sa(スイス)。本誌の発行部数は、英語、仏語、ドイツ語、イタリア語、日本語、スペイン語、アラビア語、ロシア語、中国語の各国語版を合わせ20万6000部。

発行： UNHCR日本・韓国地域事務所  
 〒107-0052 東京都港区赤坂  
 8-4-14

TEL 03-3475-1615  
 FAX 03-3475-1647

ホームページ  
<http://www.unhcr.or.jp>

郵便振替 口座番号  
 : 00130-4-59734

加入者名 : UNHCR  
 業務時間 : 月曜～金曜日  
 9:30～17:30

(昼休み12:30～13:30)

日本語版発行：1998年10月

表紙： モザンビークの子どもたち。多くは避難先で生まれたが、故郷への帰還に喜びにあふれている。

© S. SALGADO

UNHCR  
 P.O. Box 2500  
 1211 Geneva 2, Switzerland  
[www.unhcr.ch](http://www.unhcr.ch)

# 難民 REFUGEES

1998年 第5号 (通巻112号)

## 2 編集部から

UNHCRは緊急事態への即応能力を磨いてきたが、帰還した難民たちには何が待っているのか。

## 4 特集

難民170万人の帰還は大成功したが、モザンビークの未来はどうなるのか。

レイ・ウィルキンソン

モザンビーク早わかり

## 11 キリング・フィールド再訪

数年前と同じことがカンボジアで起きた。

フェルナンド・デル・ムンド

## 14 世界から締め出されて

国民国家という世界の政治制度から締め出されて国を失った人々

## 16 世界難民情勢

地図でみる世界の難民

## 18 世界はいま

リベリア：帰還の年

ポール・ストロンバーク

ソマリア：ポートピーブルの新たな波

ピーター・ケスラー

## 23 Quote Unquote

さまざまな人の一言

## 24 アルゼンチン

南米唯一の仏教寺院

ナズリ・ザキ

書評

## 26 Short Takes

世界からの短信

## 28 フォト・エッセー

サハラ砂漠の難民の生活

## 30 People and Places

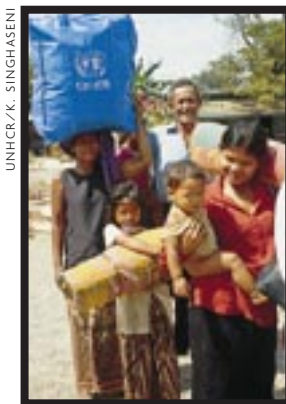
## 31 記録資料

アフリカの「最初」の難民



© M. USSENE

4 長年の内戦の終結で、おびただしい数のモザンビーク難民が帰還をはたしたが、未来は不透明なままだ。



UNHCR/K. SINGHASENI

11 1997年、新たな戦闘がおきて4万5000人ものカンボジア人が避難。一部は帰還したが、タイの難民キャンプに残った人も多い。



UNHCR/P. STROMBERG

18 1998年に見込まれていたリベリア難民の帰還は、政治や物資輸送上の問題から遅れている。